姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第95集

山吹遺跡

―第5次・第6次発掘調査報告書―

空から見た山吹遺跡周辺（中央が高岡小学校）

2020

姫路市教育委員会

－序－

姫路市内には、約 1,200 か所を数える遺跡が所在しております。本市ではこれらを貴重な歴史遺産として後世に伝えていくための埋蔵文化財の発掘調査、整理、研究や展示などの公開事業を実施し、その保存と継承に努めております。このたび発掘調査を実施しました西今宿の周辺は縄文時代から中世にかけての集落跡である辻井遺跡や今宿丁田遺跡、今も塔心礎が現地に残る辻井廃寺などの主要遺跡が所在し、播磨地域の歴史を語る上で欠かすことのできない地域です。このたびの調査では、奈良時代の遺構が確認され、遺跡の範囲が従来知られていたよりもさらに南に広がることが判明するなど新たな成果を得ることができ、地域の歴史解明の一助になるものと考えております。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました関係者各位に心から御礼申し上げます。

令和２年（2020 年）３月
姫路市教育委員会
教育長　松田克彦

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査地の位置

1.　調査に至る経緯

姫路市西今宿四丁目８番１に所在する姫路市立高岡小学校において、プール改築工事が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地に該当していなかったが、山吹遺跡（県遺跡番号：020160　古墳・奈良時代、その他の遺跡）の南端に隣接しており、兵庫県教育委員会及び姫路市教育委員会の既往調査により、遺跡が広がる可能性が示唆されていた。このことから、工事に先立ち試掘調査を実施した。調査は、４ヶ所の試掘溝を設定し、平成 30 年９月 11 日から 13 日に実施した。その結果、既存のプールの範囲は撹乱を受けて遺構は確認できなかったものの、プール拡張範囲から、弥生時代中期および奈良～平安時代の遺構を検出した。このように、部分的にではあるものの、遺跡が良好に保存されていることが判明したことから、プール拡張範囲のうち施工により遺構に影響が及ぶ 43 ㎡を対象とし、本発掘調査を実施することとなった。調査期間は、平成 30 年９月 27 日から 10 月５日である。

本調査は、山吹遺跡において姫路市が実施した発掘調査のうち、試掘調査が山吹遺跡第５次（調査番号：20180206）、本発掘調査は第６次調査にあたる（調査番号：20180223）。

2.　調査地の位置と周辺の遺跡

山吹遺跡は姫路平野の北西端の姫路市西今宿八丁目周辺に所在する。夢前川中下流域、菅生川との合流地点の東岸に所在する振袖山・蛤山の東麓に位置し、標高は T.P. 19m 前後である。周辺には縄文時代から中世にかけての集落跡である辻井遺跡、辻井遺跡の中央付近には７世紀後半の創建とされる辻井廃寺がある。南東には石製銅鐸鋳型が出土したことで著名であり、また古代山陽道の草上駅家の候補地のひとつとされる複合遺跡である今宿丁田遺跡、南には昭和 22 年に今里幾次氏が瓦を表採し、周知されることとなった今宿遺跡など、市内の主要遺跡が存在する。（図 1）。

3.　既往調査

山吹遺跡は、都市計画道路山吹線の整備工事に先立ち兵庫県教育委員会が平成９年度に実施した試掘調査によって発見された。平成 10 年度、13 年度、16 年度には本発掘調査が実施、正方位に主軸をとる古代の溝を検出したことから、道路遺構の可能性が指摘され注目を集めた。その後平成 20 年度に遺跡の南側で姫路市教育委員会が実施した試掘調査（第１次調査）で、N-7 ～ 8°-W の主軸をとる奈良時代の南北方向の溝を検出し、遺跡が南に広がることが判明した。
平成 21 年度に実施した第２次調査では、第１次調査で確認した溝が 50m 以上伸び、さらに南に続いていることが判明するとともに、北白川下層式土器及び、サヌカイト、チャート等のチップを大量に含む縄文時代前期の包含層を確認した。
平成 29 年度に実施した第４次調査でも、第１次～３次調査地の南で遺構を確認し、遺跡の範囲が南に拡張した。今回の第５次、第６次調査により、遺跡の範囲はさらに南に拡張することが判明し、いまだ遺跡全体の規模は把握できていない。
第５次、第６次調査地の西側約 150m 地点では、都市計画道路山吹線の敷設に先立ち兵庫県が今宿遺跡の調査を実施しており、東西方向の溝が確認されている。このため、山吹遺跡と今宿遺跡が一連の遺跡である可能性も考えられる。

図1　周辺の遺跡と調査の位置（S=1:30,000）

第Ⅱ章　調査の成果

1.　調査区の基本層序

基本層序は約 20cm の盛土、約 30cm の包含層を経て基盤層である黄灰色シルト～粘土層に至る。基盤層の標高は 18.2 m前後で、その上面で遺構検出を行った。

検出した遺構は、弥生時代中期の遺物を含む溝状の落ち、古墳時代末～奈良時代の溝、柱穴、平安時代の溝、柱穴などである。以下、調査次数ごとに主要遺構の詳細を述べる。なお、遺構番号は図 3、図 4 に示すとおりである。

2.　第 5 次調査

遺跡の有無と保存状況を把握するため、4 ヶ所の試掘溝を設定し、試掘調査を実施した。調査面積は合計 61 ㎡である。調査の結果、1・2・3 区で遺構・遺物を確認し、山吹遺跡が調査地まで広がっていることが判明し、包蔵地の範囲を変更することとなった。以下に調査区ごとの成果を述べる。

1 区　2m×13.5m の調査区である。現地表面から 20 ～ 30cm の盛土、30cm の包含層を経た T.P.18.1m で、溝 3 条、柱穴 1 基を検出した。このうち SD1 は幅 50cm を測り、主軸を N - 60 ～ 65°　- W にとる。第 5 次調査では遺構検出にとどめた。SD2 は、調査区東端において検出した南北方向の溝である。西肩から 2.1m分を検出し、東は調査区外に延びることから全幅は不明である。一部を断割ったところ、深さは最大 42cm であった。埋土からは、古墳時代末葉～平安時代の須恵器、土師器、平瓦などが出土した。SD3 は、幅 4m、深さ 1.1m の南北方向の溝である。一部を断割ったところ、断面が純角三角形を呈し、基盤層の砂礫と粘土が薄く互層に堆積している部分があるものの、埋土はおおむね均質であった。黒褐色の埋土から弥生時代中期の壺や甕が出土した。調査範囲が狭小であることから、谷地形が自然埋没したのか遺構であるかの判断が困難である。柱穴は調査区北壁付近で 1 基確認した。直径 30cm 深さ 40cm を測る。遺物が出土しなかったため、時期は不明であるが、埋土は SD1 に近似する。

2 区　1.5m×8m の南北方向の調査区である。現地表面から 20 ～ 30cm の盛土直下で基盤層を検出した。標高は、T.P.18.5 m である。調査区南端から 2 基の柱穴を検出した。SP2 は直径 40cm、深さ 25cm を測る。SP3 は直径 15cm、深さ 15cm を測る。SP3 から底部糸切りの土師器皿が出土したことから時期は平安時代末から鎌倉時代頃と考えられる。

3 区　1.5m×8m の東西方向の調査区である。現地表面から 20 ～ 30cm の盛土直下で基盤層を検出した。標高は、T.P.18.5 ～ 18.3m である。調査区東端から 1 基の柱穴を検出した。直径 40cm、残存深さ 30cm を測る。柱痕跡は確認できなかった。

4 区　1m×10m の東西方向の調査区である。現地表面から 30 ～ 50cm の盛土直下で基盤層を検出した。標高は、T.P.18.3 ～ 18.1m である。遺構、遺物ともに検出しなかった。

3.　第 6 次調査

第 5 次調査で遺跡の存在が判明したことから本発掘調査を実施した。対象範囲は、地盤改良工事によって遺構に影響が及ぶ部分 10 ヶ所とし、調査面積は計 43 ㎡である。1 ～ 9 区は、第 5 次調査 1 区の周辺に所在し、このうち 8 区、9 区は第 5 次調査 1 区とほぼ同位置であり、第 5 次調査では検出、断割りのみにとどめた遺構の調査を実施した。このため、柱穴以外は第 5 次調査 1 区で検出した SD1 ～ 3 と同じ遺構の続きを検出した（以下遺構番号のみを記す）。ここでは調査区毎ではなく、1 ～ 9 区と 10 区に分けて記述する。

1~9区　SD1 は 1 区、3 区、6 区、8 区、9 区で検出した。8 区、9 区では、主軸が N - 60 ～ 65°　- W だったが、緩やかに湾曲し、1 区、3 区では主軸が N - 5°　- W となっていた。幅は調査区によって若干の差はあるものの、おおむね 50cm 前後である。深さは最大 42cm。断面形状は逆台形で、埋土も遺構検出面である土層（図 5-8 層）のブロックを多く含むことから、水路ではなく布掘りの柵や柵の跡である可能性が想定される。1 区と 6 区では出土した須恵器から、遺構の時期は奈良時代と考えられる（図 6-4,6）。SD2 は、2 区、3 区、6 区、8 区で検出した。西肩プランから想定する遺構の主軸方向は、N - 45°　- W をとる。遺構の規模、埋土の堆積状況は、第 5 次調査成果と同様である。底に堆積した粗砂から底部糸切り平高台の須恵器椀（図 6-15）が出土していることから、平安時代半ば頃までは機能していたことがうかがえる。SD3 は、1 区、5 区、8 区、9 区で確認した。3 区では SD3 の一部を検出すると予測していたが、撹乱を受け消失していた。遺構の主軸方向、埋土の堆積状況、出土遺物は、第 5 次調査成果と同様である。8・9 区で弥生時代中期（Ⅳ期）の壺の口縁部と底部が出土した（図 6－1, 2）。柱穴は、3 区で 4 基、4 区で 2 基、6 区で 4 基、7 区で 1 基、8 区で 4 基の 15 基を確認した（図 3, 4）。このうち SP3-1、SP3-4、SP4-1、SP4-2、SP6-1、SP6-2、SP7-1、SP8-4 からは奈良時代の須恵器、土師器片が出土した。なかでも、SP3-1 からは須恵器杯 B が（図 6-5）、SP6-1 からは大量の貝殻と共に、形状が杯 A で底部回転ヘラ切りの土師器杯（図 6-3）が出土した。杯 B は、器壁の立ち上がりが垂直に近く、土師器はいわゆるロクロ土師器であることから必ずしも土師器の編年観に当てはまらないものの、同器種の須恵器の形状と比較すると、奈良時代前半の範疇に収まると考えられる。

10 区　調査区全体が北西から南東方向に主軸をとる河道の範囲内にあたる。調査区が狭小であるため、全体の規模は不明であるが、現地表面から東方の深さは 1.3m を測る。上層からは須恵器片が出土し（図 6 - 7 ～ 9）、9 層以下からは弥生時代後期の壺や高杯が細片ながら出土した。

第Ⅲ章　総括

今回の調査では、弥生時代中期、弥生時代後期、奈良～平安時代の遺構の広がりを新たに確認することができた。山吹遺跡および近接する今宿遺跡では、これまで古代の遺構は溝のみが検出されていたが、今回の調査では同時期の溝に加えて、奈良時代の柱穴及び、棚列の可能性がある溝状遺構 SD1 を検出した。このことから、山吹遺跡、今宿遺跡の性格を検討するうえでの新たな資料を得ることができた点は、主要な成果に挙げられる。

また、第 6 次 8 区において、遺構検出面より下位の土層堆積状況を確認するため断割りを行ったところ、遺物の時期、器種は不明であるが、微細な素焼きの土器片を含んでいた（図 5 - 8 ～ 11 層）。この層は、弥生時代中期の遺物を含む SD3 に切られていることから、それ以前の時期に堆積したものとみられる。北側で実施した山吹遺跡第 2 次調査では、縄文時代の遺物包含層を確認しており、当該地付近まで同時期の土層が広がっている可能性も考えられる。

【参考文献】

『今宿遺跡Ⅰ』2008　兵庫県文化財調査報告 第 333 冊　兵庫県教育委員会
『今宿遺跡Ⅱ・山吹遺跡』2008　兵庫県文化財調査報告 第 332 冊　兵庫県教育委員会
『都城の土器Ⅰ　都城の土器集成』1992　古代の土器研究会
『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976　奈良国立文化財研究所
『平城宮発掘調査報告Ⅺ』1982　奈良国立文化財研究所
※須恵器、土師器の器種名は、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』・『平城宮発掘調査報告Ⅺ』に準拠した。

図版 1

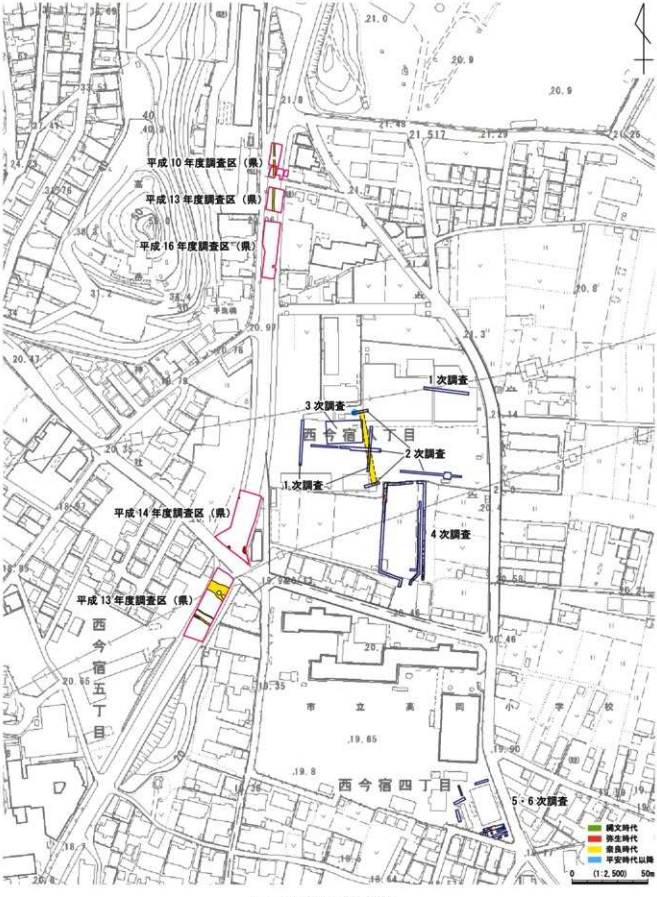


図2　周辺の調査（S=1:2500）

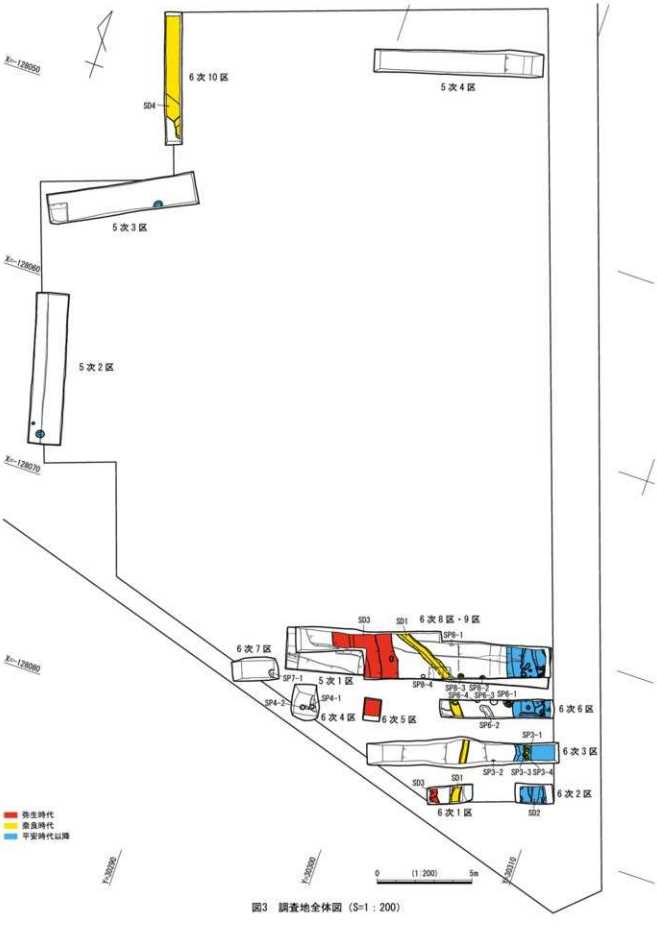
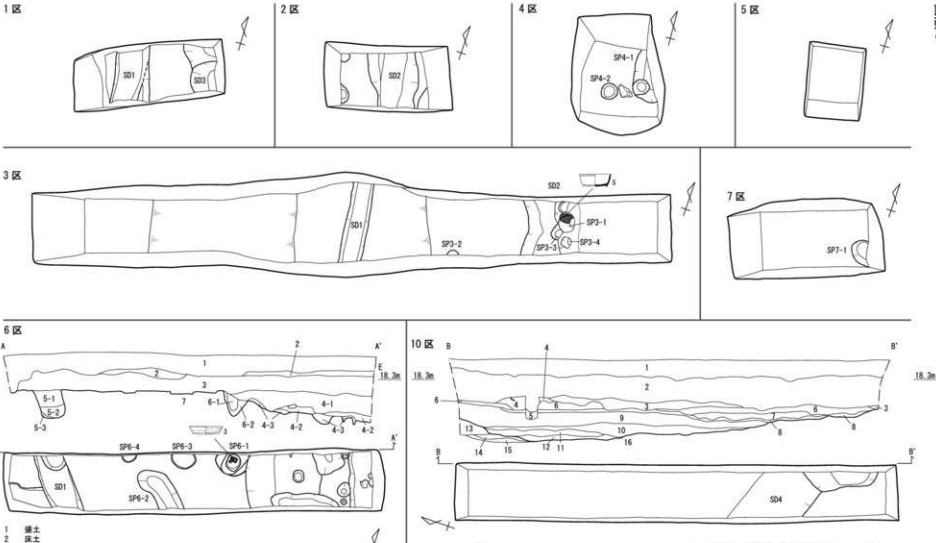


図3　調査地全体図（S=1：200）



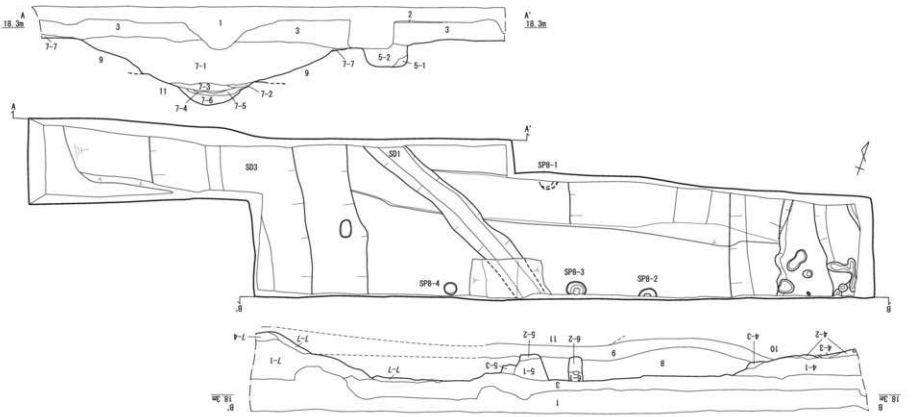
1　盛土
2　床土
3　2.5Y5/3黄褐色シルト～粘土　土器片多く含む
4-1　2.5Y5/3～5/2黄褐～暗灰黄色シルト～粘土　土器片多く含む→SD2埋土
4-2　2.5Y5/3～5/2黄褐～暗灰黄色シルト　土器片多く含む→SD2埋土
4-3　2.5Y5/3～5/2黄褐～暗灰黄色礫混じり粗砂　土器片多く含む→SD2埋土
5-1　2.5Y6/4シルト～粘土　10YR4/1褐灰色粘土ブロック含む→SD1埋土
5-2　10YR4/1～4/2褐灰～灰黄褐色粘土　2.5Y6/4にぶい黄色シルト～粘土ブロック少量含む→SD1埋土
5-3　2.5Y6/4シルト～粘土　10YR4/1褐灰色粘土ブロック含む→SD1埋土
6-1　2.5Y4/2暗灰黄色粘土　2.5Y6/4にぶい黄色シルト～粘土ブロック少量、土器、貝殻多量含む→SP6-1埋土
6-2　2.5Y6/4にぶい黄色シルト～粘土　10YR4/1褐灰色粘土ブロック少量含む→SP6-1埋土
7　2.5Y6/4にぶい黄色シルト～粘土→基盤層（※6区・9区9層）

1　盛土
2　2.5Y5/3黄褐色シルト～粘土　土器片多く含む
3　2.5Y5/3黄褐色シルト～粘土　6層ブロック含む
4　2.5Y5/3黄褐色シルト～粘土
　　細かい6層ブロック均質に含む→SP掘方
5　2.5Y5/3黄褐色シルト～粘土　9層ブロック含む→SP柱根
6　10YR4/4～4/3褐～にぶい黄褐色シルト混じり砂礫
7　10YR4/4褐色砂
8　2.5Y3/1黒褐色シルト～粘土
9　10YR3/1～3/3黒褐～褐色砂礫混じりシルト～粘土
10　10YR4/1～5/3シルト混じり粗砂～砂礫
11　10YR5/4～5/3黄褐色シルト～粘土ブロック
12　10YR3/3～4/2暗褐～灰黄褐色砂礫
13　10YR5/4～5/3にぶい黄褐色シルト～粘土～基盤層
14　10YR5/4～5/3にぶい黄褐色砂礫～基盤層
15　10YR5/4～5/3にぶい黄褐色砂多量混じりシルト～基盤層
16　10YR5/4～5/3にぶい黄褐色砂礫～基盤層

0　1m

図4　第6次調査 調査区平面図・断面図1　(S=1：60) ※遺物番号は図6に準拠

8区・9区



1　盛土
2　床土
3　2.5Y5/3黄褐色シルト～粘土　土器片含む
4-1　2.5Y5/3～5/2黄褐～暗灰黄色シルト～粘土　土器片多く含む→SD2埋土
4-2　2.5Y5/3～5/2黄褐～暗灰黄色シルト　土器片多く含む→SD2埋土
4-3　2.5Y5/3～5/2黄褐～暗灰黄色礫混じり細砂　土器片多く含む→SD2埋土
5-1　2.5Y6/4シルト～粘土　10YR4/1褐灰色粘土ブロック含む→SD1埋土
5-2　10YR4/1～4/2褐灰～灰黄褐色粘土　2.5Y6/4にぶい黄色シルト～粘土ブロック少量含む→SD1埋土
5-3　2.5Y6/4シルト～粘土　10YR4/1褐灰色粘土ブロック含む→SD1埋土
6-1　10YR4/1褐灰色粘土　2.5Y6/4にぶい黄色シルト～粘土ブロック少量含む→SP8-3埋土
6-2　2.5Y6/4にぶい黄色シルト～粘土　10YR4/1褐灰色粘土ブロック少量含む→SP8-3埋土
7-1　10YR3/1～3/2黒褐色砂混じりシルト～粘土　土器片含む→SD3埋土
7-2　10YR5/3～4/2にぶい黄褐～灰黄褐色砂混じりシルト～粘土　土器片含む→SD3埋土
7-3　10YR3/2黒褐色砂礫混じりシルト　土器片含む→SD3埋土
7-4　10YR3/1～3/2黒褐色砂礫　土器片含む→SD3埋土
7-5　10YR3/2黒褐色砂　土器片含む→SD3埋土
7-6　10YR3/1～3/2黒褐色砂混じりシルト　土器片含む→SD3埋土
7-7　10YR4/2灰黄褐色シルト～粘土　土器片含む→SD3埋土
8　2.5Y6/3にぶい黄色シルト～粘土　炭化物片微量に含む
9　2.5Y6/4にぶい黄色シルト～粘土
10　2.5Y6/4～5/4にぶい黄～黄褐色シルト～粘土
11　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂礫

0　(1:60)　1m

図5　第6次調査 調査区平面図・断面図2（S＝1：60）

図版4

図版 5

写真1　第5次　1区（西から）

写真2　第5次　1区　北壁断面（西から）

写真3　第5次　2区　西壁断面（北東から）

写真4　第5次　2区（北から）

写真5　第5次　3区（東から）

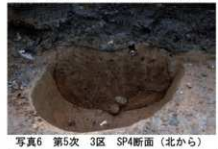


写真6　第5次　3区　SP4断面（北から）

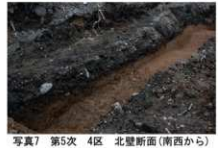


写真7　第5次　4区　北壁断面（南西から）

写真8　第5次　4区（東から）

写真9　第6次　1区（西から）

写真10　第6次　2区（東から）

写真11　第6次　3区（東から）

写真12　第6次　6区、8区、9区(西から)

写真13　第6次　4区（北から）

写真14　第6次　5区　南壁断面（北から）

写真15　第6次　7区（東から）

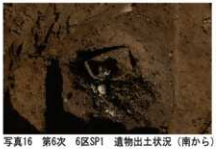


写真16　第6次　6区SP1　遺物出土状況（南から）

写真17　第6次　6区　北壁断面(東から)

写真18　第6次　8区　南壁断面(北から)

写真19　第6次　10区　東壁断面(南西から)

写真20　第6次　10区(北から)

図版 7

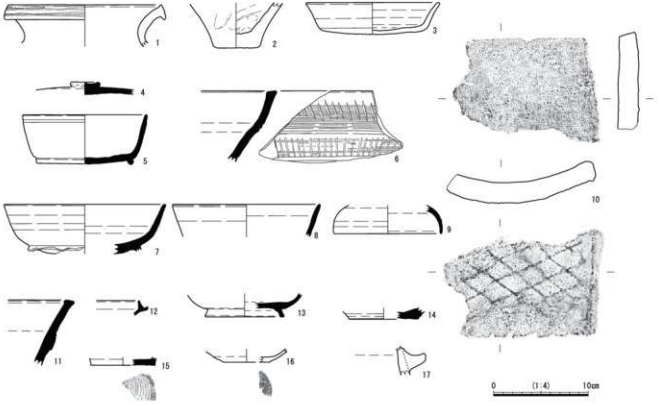


図6　出土遺物実測図（S＝1：4）

番号	次数・区名	出土遺構	層位他	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存状況	焼成	色調(内)	色調(外)	胎土	調整(外)	調整(内)	備考
1	6次 8・9区	SD3	下層	弥生土器 壺	(16.1)	(4.4)	-	(17.1)	口縁部～頸部20%	普通	7.5YR7/6橙色	5YR7/6橙色	密 φ1.5mm以下の白色・灰色砂粒少量含む	口縁部 回編	ナデ	
2	6次 9区	SD3	暗灰褐色土	弥生土器 壺	-	(4.8)	4.8	-	底部75%	普通	7.5YR6/1褐灰色	7.5YR6/4にぶい橙色	やや粗 φ0.3～1.5mm白色・黒色砂粒多量含む	板ナデ	板ナデ・指おさえ	
3	6次 6区	SP6-1	No.1	土師器 杯	13.8	3.4	11.4	-	口縁部～底部80%	普通	7.5YR6/4浅黄橙色	7.5YR7/6橙色	密 φ0.1～1mm白色・灰色・赤褐色砂粒少量含む	底部回転ヘラ切 回転ナデ	回転ナデ	図A
4	6次 1区	SD1	下層	須恵器 蓋	-	(1.4)	-	-	つまみ部100%	良好	7.5Y7/1灰白色	5Y7/1灰白色	密 φ0.5～2mm白色・灰色砂粒極少量含む	回転ナデ	回転ナデ	
5	6次 2区	SP3-1 東端標高		須恵器 杯	13.0	5.2	10.3	-	口縁部～底部80%	良好	5Y8/2灰白色	2Y8/1灰白色	密 φ0.5～2mm白色・灰色・褐色砂粒含む	波状文 回転ナデ 平行タタキ	回転ナデ 部分的に赤酸化付着	図B
8	6次 4区	SD1		須恵器 壺	-	-	-	-	口縁部5%	良好	N7/灰白色	N4/灰色	密 φ0.5～1mm白色・灰色砂粒少量含む	カキ目・刻み文	回転ナデ	
7	6次 10区	SD4	4層	須恵器 杯	(16.8)	(3.2)	-	-	口縁部～底部20%	良好	N7/灰白色	N6/灰色	密 φ0.5～1mm白色・灰色砂粒少量含む	底部回転ヘラ切 回転ナデ	回転ナデ	図B
6	6次 10区	SD4	上層	須恵器 杯	(15.5)	(3.45)	-	-	口縁部20%	普通	5Y7/1灰白色	5Y7/1灰白色	密 φ0.5～1mm白色・灰色砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	
9	6次 10区	SD4	上層	須恵器 蓋	(11.3)	(3.0)	-	-	口縁部20%	普通	7.5Y7/1灰白色	7.5Y7/1灰白色	密 φ0.5mm以下の灰色砂粒極少量含む	回転ナデ	回転ナデ	
10	6次 2区	SD2	最下層(砂礫層)	平瓦	残存長(11.0)	厚2.1	残存幅(12.7)		20%	普通	10YR6/6明黄褐色	10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗 φ1～1.5mm白色・灰色・褐色砂粒含む	口縁部ヨコナデ 整形 山下タテハケ	口縁部ヨコナデ 整形 山下タテハケ	
11	6次 2区	SD2	最下層(砂礫層)	須恵器 壺	-	(6.9)	-	-	口縁部10%	普通	2.5GY7/2明オリーブ灰色	2.5GY7/2明オリーブ灰色	密 φ1mm以下の白色・黒色砂粒多量含む	回転ナデ	回転ナデ	把手貼り付痕跡
12	6次 2区	SD2	最下層(砂礫層)	須恵器 杯身	-	-	-	-	口縁部10%	良好	5Y8/1灰色	5Y8/1灰色	密 φ0.5～1mm白色・褐色・灰色砂粒極少量含む	回転ナデ	回転ナデ	図C
13	6次 2区	SD2	最下層(砂礫層)	須恵器 杯	-	(2.3)	(9.3)	-	体部下方～底部30%	普通	N7/灰白色	N7/灰白色	密 φ0.1～1mm白色・橙色砂粒少量含む	底部回転ヘラ切 回転ナデ	回転ナデ	図B
14	6次 2区	SD2	最下層(砂礫層)	須恵器 椀	-	(1.2)	(7.4)	-	底部20%	良好	7.5Y7/1灰白色	5Y7/1灰白色	密 φ0.1～3mm白色・灰色砂粒少量含む	底部回転ヘラ切 回転ナデ	回転ナデ	
15	6次 6区	SD2	最下層	須恵器 椀	-	(3.9)	(6.6)	-	底部20%	普通	5Y7/1灰白色	5Y7/1灰白色	密 φ0.1～1mm白色・灰色砂粒少量含む	底部糸切	底部糸切	
16	5次 2区	SP3		土師器 鉢	-	(1.4)	(4.9)	-	体部下方～底部30%	普通	10YR6/3浅黄橙色	10YR6/3浅黄橙色	密 φ0.5～1mm白色・褐色・灰色砂粒少量含む	回転ナデ 底部糸切	回転ナデ 底部糸切	
17	6次 1区		3層内	土師器 羽釜	-	-	-	-	鍔の一部	普通	10YR6/4浅黄橙色	10YR6/4浅黄橙色	やや粗 φ1mm以下の褐色・白色・黒色砂粒含む	ナデ	ナデ	

表1　出土遺物観察表

写真12　出土遺物写真　※写真の番号は図6に準拠

報告書抄録

ふりがな	やまぶきいせきだい5じ・だい6じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	山吹遺跡第５次・第６次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第95集
編著者名	小柴治子
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1　TEL（079）252-3950
発行年月日	令和2年（2020年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山吹遺跡（やまぶきいせき）	兵庫県姫路市（ひょうごけんひめじし） 西今宿四丁目8番1（にしいまじゅくよんちょうめはち）	28201	020160	34°50′42″	134°39′52″	2018. 9. 11～9. 13(5次) 2018. 9. 27～10. 5(6次)	61㎡(5次) 43㎡(6次)	プール改築

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
集落跡	弥生時代	溝	弥生土器	20180206(5次) 20180223(6次)
	奈良時代～平安時代	溝 柱穴	瓦、須恵器、土師器	

要約	試掘調査により、周知の埋蔵文化財包蔵地が従来認識されていた範囲よりも広がることが判明し、弥生時代、奈良時代～平安時代の遺構を確認した。なかでも、奈良時代の遺構が多く、断面が逆台形を呈する溝や柱穴などを検出し、周辺の調査成果と合わせて、同時期の遺跡の広がりを新たに把握することができた。

－例言－

1. 本書は、兵庫県姫路市西今宿四丁目８番１で実施した山吹遺跡（遺跡番号：020160）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、姫路市教育委員会教育総務部学校施設課が施工する姫路市立高岡小学校プール改築工事に先立ち、平成 30 年度に同課より依頼を受け、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが実施した。
3. 整理作業、報告書の編集は、令和元年度に姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが実施した。
4. 令和元年度の体制は下記のとおりである。[（ ）内は、平成 30 年度に在籍した職員]

姫路市教育委員会
教育長　松田克彦
教育次長　坂田基秀　（名村哲哉）
生涯学習部
部長　沖塩宏明　（岡田俊勝）
文化財課
課長　花嶋和宏
課長補佐　大谷輝彦
技術主任　関梓

埋蔵文化財センター
館長　前田光則
課長補佐　岡崎敏俊
係長　森恒裕
職員　竹井宏文
技術主任　小柴治子（調査・整理担当）
中川猛、福井優、南憲和
技師　黒田 祐介
技師補　山下大輝

5. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。
6. 発掘調査・出土品整理及び報告書の作成にあたっては、姫路市立高岡小学校より御協力を賜った。

－凡例－

1. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。
2. 土層名は、農林水産省農林水産技術会事務局・『新版標準土色帳』（1999 年度版）に準拠した。
3. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。
ピット→SP　土坑→SK　溝→SD

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第95集

山吹遺跡第5次・第6次発掘調査報告書

令和2年（2020年）3月31日発行

編集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246
兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL（079）252-3950

発行　姫路市教育委員会
〒670-8501
兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　内海印刷株式会社
〒670-0808
兵庫県姫路市白国5-8-4